

# 「音楽的な感受」を重視した音楽科授業の在り方 —音楽のよさや楽しさを感じる自己評価力の育成を通して—

所属校：北 区 立 谷 端 小 学 校  
氏 名：金 子 陽 子  
派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：音楽的な感受・共通事項・自己評価力・ルーブリック

## I 研究の目的

### 1 「音楽的な感受」の育成の必要性

#### (1) 音楽科授業における現状と課題

これまで音楽科授業では、子供の思いや願いを重視するあまり、子供がその時間を愉快地に過ごすことが優先される授業があった。一方、音楽会やコンクールでの良い演奏が目的となる授業や、教師が目指す演奏技能の習得が目標となっている授業も存在していた。このように情意面と能力面のバランスを欠いた指導の結果、子供が音楽を表現する喜びや音楽的な深まりを自覚できず、感動の薄い授業が行われていたのではないかと考える。

これでは、音楽科の目標において示されている「音楽を愛好する心情」、「音楽に対する感性」、「音楽活動の基礎的な能力」を、常に児童の情意面と能力面をかかわらせながら指導することにつながらないのである。

#### (2) 【共通事項】新設の意義と本研究の必要性

国の教育施策では、中央教育審議会答申において、音楽科の改善の基本方針（平成20年1月）が示され、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり聴いたりする力を育成することが大切であると指摘した。また、表現と鑑賞の活動の支えとなる指導内容を【共通事項】として示し、音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力の育成を一層重視した。

このことを受け、改訂学習指導要領では、【共通事項】が新設された。これは、音楽科での思考力・判断力にあたる「音楽的な感受」を育成する手がかりになるものとする。この「音楽的な感受」の育成について、多くの研究会等で重要性が叫ばれているが、教師から見えにくいといった側面があり、どのような内容をどのような方法で指導するのか、その実践については、あまり研究されてはいない。

そこで、本研究では授業研究等により「音楽的な感受」が深まる児童の姿を分析し、「音楽的な感受」を深める授業実践を行うために、指導過程や評価の在り方を実証的に研究することとした。

## II 研究の方法

### 1 研究の対象

都内公立小学校 第1学年～第6学年 単学級

### 2 研究の方法

#### (1) 文献研究及び各種調査

- ①先行研究から「音楽的な感受」が重要視される経緯を明らかにし、研究の出発点とした。
- ②各種調査、各機関によるアンケート、音楽研究会フィールド観察により課題を整理した。

#### (2) 授業づくりの構想

- ①「音楽的な感受」を深める授業構想(全学年)を作成し、検証授業を行い、協議会での振り返りをもとに、授業構想を改善した。
- ②見えにくい力である「音楽的な感受」を評価するために、ルーブリック評価方法を取り入れた。

#### (3) 実践研究とその分析

共通事項を位置付けた「音楽的な感受」を深める年間指導計画や題材の指導計画に基づいた検証授業を行い児童の変容について分析した。

## III 研究の成果

### 1 文献研究及び各種調査

#### (1) 学習指導要領から見た「音楽的な感受」育成の重要性

小学校学習指導要領解説音楽編（平成20年8月）によると、「音楽に対する感性」とは、音楽の様々な特性に対する感受性を意味し、「音楽的感受性」と捉えている。「音楽的感受性」は美しいものや崇高なものに感動する心を育てるのに欠かせないものであり、豊かな心をはぐくむ基盤である。

#### (2) 「見えにくい学力」「音楽的な感受」の重要性

平成3年の指導要録の改訂に伴い「新しい学力観」が示された。それは、「知識・技能」といった客観的な評価が可能な「見える学力」を、「関心・意欲・態度」や「思考力・判断力・表現力・感性」等といった目に見えにくく、客観的な評価の難しい「見えにくい学力」と関連させながら育成するというものである。観点2の文言である「音楽的な感受」は、音楽を特徴づける様々な要素を聴き分

けたり、その要素の働きが生み出す曲想を感じ取ったりする能力であり、「見えにくい学力」であるが、音楽学習の要となるものである。

### (3) 「音楽的な感受」の評価の難しさ

#### ① 音楽科における評価の問題点

(財) 音楽鑑賞教育振興会 (2007) 「学校における鑑賞指導に関するアンケート第2回調査報告書」によると、小・中学校を通じて約77%の教員が、鑑賞領域の指導における評価について、子供たちが音楽を鑑賞して何を感じ取っているのか、その状況を把握し評価することが難しいと感じている。

また、小山 (1994) によると、音楽科の評価が困難なものと考えられている理由に、「芸術に標準や基準はなく、教師の主観によっている。」「音楽が時とともに消え去り、形として残らず、遡って判断できない。」「集団活動が多く、個々の子供の変容を捉えにくい。」等が挙げられている。

さらに、「音楽的な感受」については児童の感じ取り方が教師から見えにくく、指導者によって観点が異なっていることが、評価を難しくさせていると考えられる。

#### ② 学習者の視点に立った「評価」の在り方

評価において、教師がどう評価するかという視点だけでなく、学習者の視点に立った評価をすることが大切である。学習者にとって、自分の演奏が「おおむね良好」という評価を受けたとしても、それだけでは、どこが良いのか、どのような点がまだ不十分なのかは分からない。(小山 (1994))

音楽活動の主体である学習者の主観を磨くこと、すなわち「自己評価」を重視することが重要となる。「自己評価」とは、学習者自らが学習過程を振り返り、新たな自分の目標や課題をもって学習を進めていくための評価である。それは、「音楽的な感受」を深めていくことと同義であると考ええる。なぜなら音楽科は本質的に、表現及び鑑賞を通して音楽とかわる中で、学習者が常に美的価値を経験する教科だからである。

## 2 授業実践

### (1) 「音楽的な感受」を深める授業と「自己評価力」の育成

「音楽的な感受」を深めるためには、まず児童が自分の出す音に関心を持ち、その音がどのように変化していくか、自ら気付くことが大切である。つまり、自分の演奏する音を自ら認識することでそれは、自分の音を自己評価することである。こ

の自己評価力の育成が「音楽的な感受」の深まりに大きくかかわっていると考え、以下の手立てで授業実践を行った。

#### ① ねらいをしぼった授業展開

ア [共通事項] を位置付けた題材指導計画の作成  
イ 知覚・感受する要素をしぼった教材選択

#### ② 自己評価力を伸ばす指導の手立て

ア 自己評価を促す学習課題の設定・発問の工夫  
・児童による自己目標の設定  
・児童相互のかかわりをもたせる課題設定  
・能動的聴取を促す教材選択の工夫  
・比較聴取を位置付けた指導計画の作成  
イ 児童が感じ取ったことを言語化する工夫  
・音楽の要素を焦点化した板書・学習カードの工夫  
・ポートフォリオの活用

### (2) 一人一人のよさを的確に把握する教師の評価力

学習者の自己評価力を高め、より高い価値を求める方向に向かわせるためには、教師自身も音楽にかかわる主体として、その評価力を自ら磨くことが求められる。また、児童一人一人の伸びを見極めるためには、その成長を的確に把握するものさし(尺度)が必要であると考ええる。

#### ① 目標準拠評価の必要性

平成3年の指導要録の改訂では、評価規準の概念が導入された。その意図は自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力等の身に付けるべき資質や能力の質的な面的的確な評価を目指したものと云える。

#### ② ルーブリック(評価指標)と授業改善

目標準拠評価の後には、その評価結果に応じて指導を行う。達成の程度を量的に評価することが、身に付けるべき資質や能力の育成に向けての、指導の改善につながる。その際、児童の学習の実現状況をよりの的確に評価するためにルーブリックを作成し、活用することで、教師は自らの指導過程を振り返り、その後の授業改善に生かすことができる。

## IV 考察

1 本研究は、「音楽的な感受」というとらえにくく言語化の困難な能力を直接の研究対象とした先駆的な研究である。児童の自己評価の記述を授業改善の方策として活用する手立てについて考究した。

2 「音楽的な感受」は、児童の自己評価の表現力とともに向上するものであることを示すことができた。この点こそが、本研究が先行研究に対してもつ創的な点である。